

第358回 昭和の森自然観察会

生き物たちの冬支度

小川洋子（八千代市）

日 時：2021年12月12日（日）10:00～12:00

天候：晴れ

参加者：17名（大人10名 子ども7名）

担当指導員：川北 萩 小川 参加指導員：8名

気持ちの良い青空に恵まれた観察会、参加者は大人と子どもほぼ半々。簡単なあいさつの後、3班に分かれスタートした。

まずは恒例になったケヤキの樹皮下の虫探し。ケヤキは成長し太くなると樹皮が鱗片状に剥がれる。その剥がれかけた樹皮をめくると、いたいた小さなクモたち、ナミテントウにヒメアカホシテントウ、ルーペで見ないとわからない小さなゾウムシの仲間。虫たちはこういうところで寒さをしのいでいる。樹皮には細い紐のようなものがたくさんぶら下がっている。これは何だろう？これはヒモミノガという蛾の幼虫のすみかの名残り。残念ながら幼虫は見つからなかった。

虫探しの後はモグラのトンネル探し。モグラ塚の上の土をそっとどけて穴を探しササの棒を差し込んでみる。どこまで続いているかな。今回一番奥まで入って50cmくらい、隣の塚まで開通できず少し残念だったが、小さなモグラが地下に縦横無尽にトンネルを掘る技術を実感できた。

次に林縁に沿って歩いてみた。てっぺんに何やらモジャモジャついている枯草はセイタカアワダチソウ。ルーペで見たらモジャモジャの正体はタネがついた綿毛だった。参加者からタンポポの様との声、そうセイタカアワダチソウとタンポポは同じ仲間だ。そのアワダチソウにぶら下がっている赤いのは何だろう。カラスウリの実だ。とってみると何かが食べた痕がある。犯人は誰、頭の上でヒヨドリの声、きっとヒヨドリが食べたのだろう。実を割ってみるとヌルヌルの果肉に包まれたタネが出てきた。歯のない鳥たちが食べやすいようになっている。食べられてタネを運んでもらう植物の戦略だ。

東屋の近くのケヤキの窪みに黒い塊、これは何？ヨコヅナサシガメの幼虫の冬越しの姿だ。窪みに体を寄せ合って寒さをしのいでいる。そろそろ時間が押してきた。菰を巻いたコナラに急いだ。外した菰の中にはいろいろなクモ、ミヤマカメムシ、クサギカメムシに大きなお腹を抱えたクヌギカメムシなどなどいろいろな虫たちがいた。幹には産み付けられたクヌギカメムシの卵塊もあった。最後にコナラの樹下におちているフラスを見てもらい、ナラ枯れ病とどんぐりの木の危機について説明をした。

冬でも多くの生きものが一生懸命知恵を働かせて生きている姿を見てもらうことができた。モグラのトンネル探しや樹皮や菰下の虫探し、用意してきたクロメンガタスズメの蛹、カブトムシやクワガタの幼虫も見てもらい、楽しかったという感想をいただいた。



モグラのトンネル探し